

第四章 仕事に対する評価

4・1 仕事についての現状評価

「総合的に言って、仕事の現状に満足している」人の割合は、府中町 49.8%、三次市 56.5% で、半々に分かれている。しかし、「とても満足している」人の割合が府中町 8.2%、三次市 7.7%なのに対して、「全く満足していない人」は府中町 17.1%、三次市 15.2%と多いことを考えると、**全体として仕事に対する総合評価はややネガティブに傾く**。重回帰分析で最も重要な変数とみなされるのは「就労時間」(-.234)。**労働時間が長い者の仕事満足度は低い**。「全く満足していない人」の週あたり就労時間(男性)の中央値は、府中町 60 時間、三次市 50 時間と長い。第二に、「個人年収」(.164)。男性に限れば、府中町で年収 600 万円未満、三次市で 400 万円未満の場合、「不満」が大半を占める。また、就業状態・雇用形態による違いに説明力はないが、「サービス」(-.126、府中町 46.1%、三次市 44.2%)や「**製造作業・機械操作**」(-.136、府中町 30.0%、三次市 41.1%)といった職種の満足度が低い。それに対して、「輸送・機械運転」の高さは目立っている(0.97、府中町 80.0%、三次市 87.5%)。

ただし、男女別に重回帰分析をすると、説明モデルは多少変わってくる。男性の場合、「就労時間」の長さ(-.240)と「個人年収」(.171)が最も重要。それに対して、女性の場合は「世帯年収」(.160)が最も重要で、「個人年収」は説明力をもたない。そして、**三次市のほうが府中町よりも、女性の仕事満足度は有意に高い(.113、府中町 49.7%、三次市 56.3%)**。前述したように、三次市のほうが女性正社員で配偶者・子どもがいる比率が高く、仕事と子育てを比較的両立しやすいことが関係していると考えられる。

仕事の満足度は、階層意識と強い相関関係があり(「生活水準が高いほう」 $r=.245$ 、「生活水準が低いほうではない」 $r=.187$)、仕事の満足度が高ければ、各種の現状評価についても肯定的である傾向が強い。

4・2 仕事の将来展望について

仕事の将来展望に関しては、深刻な見通しを持っている人が多数を占める。

「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている」人の割合は府中町 35.9%、三次市 36.9%。リクルートマネジメントソリューションズが行った、大卒以上のホワイトカラー総合職の新入社員を対象とした調査(2014年)でも類似の質問で非常に低い値(21.6%)が出ており、また 2010 年と比べて 10%も低下したことが指摘されている

が、本調査でもネガティブな数字が出ている。重回帰分析では、特に「飲食店・宿泊サービス業」(-.150、特に女性)や「生活関連サービス業」(-.091)の満足度の低さが目立つ。また、「自営業主・家族従業員」(.124)や「管理職」(.099)はポジティブであるが、**被雇用者は職種・業種を問わずおしなべて「明るい希望」を持っている人は少ない**。職業では「製造作業・機械操作」(-.115、特に男性)と「事務」(-.087、特に女性)がとてもネガティブである。また、年齢が高いほうがネガティブな見通しをする人が増える(-.128)。そのほか、「職場参加としての地域活動・社会活動」(.110)や「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会関係の活動」(.104)への参加の度合の高い者は、ポジティブな見方を示す傾向が強い。全体では個人収入や世帯収入の説明力はないが、「階層意識」(「高いほう」 $r=.251$ 、「低くはない」 $r=.196$)や「金銭的余裕がある」という意識との相関が高く($r=.308$)、男性に限ると「個人年収」の説明力もある。

また、「今後の勤務先の将来(経営など)について、明るい希望を持てると思う」人の比率も府中町 34.0%、三次市 29.3%ととても少ない。重回帰分析をすると、やはり「自営業主・家族従業員」のポジティブな傾向が目立つ(.121、府中町 50.0%、三次市 56.0%)が、その一方で、「正規雇用」の勤務先に対する将来見通しは特に三次市においてとても厳しい(府中町 32.4%、三次市 23.5%)。業種では「電気・ガス・水道・熱供給」が例外的にやや高いが(府中町 57.1%、三次市 50.0%)、他の全業種について、ネガティブな将来見通しが過半数を占めている。その他の社会的属性の違いもあまりなく、勤務先について明るい希望を持っている人は少数派であるということがわかる。「勤務先について明るい希望」がある人は「20年後も同じ職場で働いている」と考える傾向にあるが($r=.331$)、全体ではそのような人は府中町 22.6%、三次市 18.6%にとどまっている。

また、「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事していると思う」人は府中町 50.9%、三次市 50.7%と回答傾向は割れている。これについては、最も説明力があるのは現在の「個人年収」である(.274)。府中町でも三次市でも、「個人年収 400 万円以上」で過半数が「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらえるだろうと考えている。しかし、過半数を占める「個人年収 400 万円未満」の人についていうと、**20年後の給料や報酬に対して、ネガティブな見通しのほうが強くなる**。また、「年齢」が上がると、より現実的な見方になるためか、厳しい見通しをする人が増える。「20代」では府中町 54.9%、三次市 54.9%なのが、「30代」では府中町 48.8%、三次市 48.8%に下がる(-.220)。業種では、特に「飲食店・宿泊サービス業」が府中町 10.0%、三次市 26.7%ときわめて低いが、これは特に女性の場合に顕著である(-.144)。そして、男性については「職場参加の地域活動・社会活動」への参加の度合の高い者は、ポジティブな見方を示す傾向にある(.183)。

そして、注目できるのは雇用形態による違いで、「正規雇用」であっても「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事している」と考えている人は、男女ともに何とか過半数に達している程度であるということだ(府中町 58.6%、三次市 55.7%)。これは、従来の年功序列を当然視する日本の雇用慣行からすれば、考えられないような低い数字であ

ると言えるだろう。まして、「仕事の主の非正規雇用」については、府中町 28.6%、三次市 35.1%にとどまり、大半の者がネガティブな見通しを示している（男性に限った重回帰分析で-.191）。これに対して、「自営業・家族従業員」のポジティブさが目立つ（.169、府中町 66.0%、三次市 72.0%）。

このように、仕事の将来展望に関しては総じてネガティブであるが、以上の質問すべてについて、「階層意識」による格差は存在している。仕事の将来展望が明るいと感じている人は、生活満足度その他の現状評価について、肯定的な回答傾向が相対的に高く、日本社会・政治について信頼度が高い人もやや多い。

4-3 職場の待遇や就労環境について

職場の待遇や就労環境について、「給料や報酬」「勤務時間」「職場の人間関係」「個人や家族の事情への配慮」の四点から考えてみる。

「給料や報酬に満足している」人は、府中町 40.1%、三次市 34.7%ととても少ない。「給料や報酬に満足」している人は、現状評価に関する多くの項目で肯定的傾向が強いが少数派である。「世帯年収 400 万円以下」では府中町 26.1%、三次市 28.5%とさらに少ない。20 代で個人年収 400 万円以上、30 代で 600 万円以上に達すれば、「満足」している人がそうでない人よりも多くなるが、それぞれ同年代の 1 割ほどしかいない。性別によって状況が違うので、別々に重回帰分析を行った結果、「総合的な満足度」と同様に、男性では「個人年収」が最も重要であるのに対して（.367）、女性は「世帯年収」の説明力が最も大きい（.161）。つまり、女性は「給料や報酬」の満足度を、自分の収入だけで見るのではなく、世帯全体の収入のなかではかる傾向が強いということである。男性の場合は、個人年収に次いで、就労時間の長さが「給料や報酬」の満足度を下げる効果がある（-.154）。そして、配偶者がいる場合、経済的負担が増えるためか、やはり仕事満足度は下がる（-.151）。女性の場合は、世帯年収に次いで、「公務員」の満足度の高さが際立つ（.135）。

「勤務時間（長さ、時間帯）に関する不満はない」のは、府中町 53.7%、三次市 56.2%。就労時間が長いと、不満は多くなる（-.302）。「正規雇用」に限ると、府中町 48.7%、三次市 49.8%と「不満はない」人の比率は減る。勤務時間について「とても不満がある」人たちの週当たり就労時間の中央値は府中町（男性 60 時間、女性 49 時間）、三次市（男性 50 時間、女性 46 時間）と長めである。「会社経営者」（.112）や「自営業・家族従業員」（.089）は、「不満はない」人が多い。業種では「情報通信業」（.105）、職種では「農林漁業」従事者（.091）の「不満はない」人の割合が多い。重回帰分析では、「勤務時間」の満足度は、就労時間以外の変数の説明力はあまりない。相関分析では「勤務時間」と「時間的余裕がある」という意識との間の相関関係が大きく（ $r=.364$ ）、勤務時間に不満がある場合、「心身ともに健康」ではないと考える人も増える（ $r=.320$ ）。

「現在の職場の人間関係に満足している」人の割合は、府中町 72.0%、三次市 72.1%ととても多い。「製造作業・機械操作」の否定的傾向の強さが突出しているが (-.171、府中町 36.0%、三次市 57.1%)、その他に「不満」が過半数を超えるような社会的属性は見当たらず、**職場の人間関係については、おおむね「満足」している人が多い**。ただし、「家事が主の非正規雇用」(府中町 96.3%、三次市 82.8%)の満足度が高いのに対して、「正規雇用」の場合は府中町 70.1%、三次市 68.7%と若干減る。正規雇用になると職場への関わりが深くなり、そのぶん人間関係についての不満も多くなるということであろう。

「家庭や個人の事情に配慮してくれる、働きやすい職場で働いていると思う」人の割合は、府中町 72.1%、三次市 75.1%。重回帰分析では、「就労時間」の短さが最も重要であるとわかる (-.247)。就労時間に媒介されて、正規雇用に限ってみると府中町 69.5%、三次市 66.4%とやや落ちる。「全くそう思わない」と回答した男性の週あたり労働時間の中央値は、府中町 60 時間、三次市 50 時間と長めである。業種では、やはり「製造作業・機械操作」の否定的傾向が強い (-.113)。また、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加の程度が高い人は肯定的である (.112)。

職場の待遇に関し、収入については否定的な回答をする人が多いが、職場の人間関係や働きやすさという点では不満な人の割合が比較的になくなる。「階層意識」との関わりが強く、これらの項目に肯定的な人は、他の問題についても現状肯定的な傾向が強い。そうしたなか、**就労時間が長くなると不満を持つ人が増え、また、職種としては「製造作業・機械操作」の不満の強さが強い**ということが言える。

4・4 仕事の魅力

自分の仕事を魅力的な仕事であると感じられているのだろうか。「仕事の楽しさ」「やりがい意識」「天職であるという意識」という三つの項目から考察を深めてみたい。

「仕事が楽しい」と感じている人は、府中町 47.3%、三次市 51.1%と約半数である。最も説明力があるのは「家事時間」(.138)。これは女性だけの効果であるが、家事に十分な時間がとれていると仕事も楽しいという結果が出ている。第二に、「製造作業・機械操作」従事者の満足度の低さが際立つ (-.108)。「製造作業・機械操作」従事者は、収入や就労時間という点では他とさほど変わらないが、有配偶率が極めて低く(府中町 9.4%、三次市 8.3%)、生活満足度に関しても多くの項目においてネガティブな評価をしている。第三に、「職場参加の地域活動・社会活動」に参加の割合が高い人は、「仕事が楽しい」という傾向が強い (.111)。いずれの要因についても、女性の場合は**仕事そのものというより、家庭生活や諸活動とのバランスがとれていることが「仕事が楽しい」と感じられる条件**となっていることが示唆される。雇用形態についていうと、正規雇用は府中町 45.1%、三次市 46.7%と「仕事が楽しい」人が非正規雇用の人たちと比べ、むしろ低い傾向にあるということが

わかる。正規雇用の場合、職場へのコミットの程度が深いために、「仕事が楽しい」とは思えないようだ。このほか、男性の場合、業種としての「輸送・機械運転」や産業としての「運輸・郵便」が「仕事が楽しい」人の比率が突出して多い。「輸送・機械運転」は、就労時間の中央値が60時間と全職種の中で最も多いが、収入も特に多いわけではない。運転という仕事に伴う「楽しさ」の特殊性を示唆している。

「仕事に「やりがい」がある」という人は、府中町62.4%、三次市67.2%と高めの比率が出ている。しかし、社会的属性による違いは大きく、重回帰分析では、やはり「製造作業・機械操作」(-.268、府中町36.6%、三次市46.2%)の否定的傾向が際立っている。この他、「仕事に「やりがい」がある」という人は、「専門技術」(府中町76.0%、三次市74.6%)職が突出して高い一方、「事務」(-.270、府中町54.7%、三次市55.3%)と「卸売・小売」(-.165)が低く、女性に限れば「サービス」(-.152)や「運搬・清掃・包装」(-.147)も低い。職種の違いによる「やりがい格差」が非常に大きいと言える。また、業種では「飲食店・宿泊サービス」の低さが目立つ(-.088)。「サービス」従事者では「やりがい」があるという人はむしろ多いほうで、同じ「サービス」従事者といっても業種による違いがあり、「飲食店・宿泊サービス」での接客従事者がきわめて低いのに対して、「医療・福祉」に属する介護従事者、あるいは「生活関連サービス業」に属する美容師などの仕事はそうではなく、「やりがい」についての感じ方にずいぶんと違いがあることが考えられる。また、年齢が上がれば「やりがい」がないと答える人が増える(-.105)。そのほか、「職場参加の地域活動・社会活動」に参加の度合いが高い人もポジティブである(.172)。

「今の仕事が「天職」である」と感じている人は、府中町39.1%、三次市41.6%と男女問わず相対的に低い。重回帰分析では、「輸送・機械運転」(.156、府中町60.0%、三次市100.0%)や「農林漁業」(.094、三次市63.7%)の肯定的な傾向が際立つ一方、やはり「製造作業・機械操作」(-.109、府中町16.6%、三次市30.8%)が低いほか、「事務」(-.123、府中町28.1%、三次市20.9%)もその低さが目立つ。また、業種では「医療・福祉」(.101、府中町52.8%、三次市46.7%)が高い。そして、女性に限って重回帰分析をすると、「個人年収」の高さによる説明力が大きい(.176)。また、ワーク・ライフ・バランスを重視した働き方を重視する人が多いためか、「家事時間」を確保できている人のほうが今の仕事を「天職」であると感じる人が多い(.122、女性限定.226)。その一方、特に女性は「職場関係の地域活動・社会活動」への関与が強い人は「天職」と感じる傾向が強い(.153)。

以上、仕事の魅力に関する三つの質問は、ともに他の質問に比べて「余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない」という回答傾向と負の相関関係にあるという点が目立っている。「仕事が楽しい」($r=-.244$)、「仕事にやりがいがある」($r=-.180$)、「仕事が天職と思える」人($r=-.156$)は、そうでない人よりも余暇よりも長時間労働を優先する価値観に親和的である。だが、分析結果からは、むしろ仕事内容そのものに備わる要素とは直接かかわらない要因の重要性が浮かび上がる。第一に、「職場の地域活動・社会活動」への参加で、仕事に関わる人間関係の充実度を高める効果があると見られる。第二に、女

性について、家庭生活との両立という観点の重要性が重要であるということである。第三に、週 60 時間超の長時間労働をしている者（男性がそのうち 77.3%）については、そうでない人に比べて、「仕事が楽しい」人（府中町 28.9%、三次市 40.4%）は断然少なく、「仕事にやりがいがある」人（府中町 55.5%、三次市 66.7%）もやや少ないことがわかる。「仕事が天職」と思える人についても、府中町は 33.3%とやはり低い（三次市については自営業の長時間労働者が多く、低くない）。総じて言って、**長時間労働者は仕事の魅力に対して、ネガティブになっている状況がうかがえる。**

4・5 転職傾向

本調査では、以下の三つの項目から、転職や勤続、そしてキャリア継続に関する意識を尋ねてみた。

「今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンス을求めて転職しようという考えは持っていない」人の割合は府中町 45.9%、三次市 46.0%と回答傾向は割れている。男性は 49.0%、女性は 43.4%である。この項目に関して、最も説明力が大きいのは「個人年収」で (.129)、「電気ガス熱供給水道」業で若干転職志向が弱い傾向が見られるほかは (.107)、他の変数にはあまり説明力がない(.129)。個人年収が低いと、転職志向の割合が増える。府中町でも三次市でも、「**個人年収**」が**男性は 300 万円以上、女性は 400 万円以上になると、転職意思のある人は半数以下になる**。仕事の現状についての満足度が高いほか ($r=.428$)、「階層意識」も高め（「高いほう」 $r=.120$ ）である場合、現状肯定傾向が強く、転職志向は少ない。転職志向がない人は「日本はこつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だと思う」人が多く、「組織に縛られない自由な考え方が大事」(-.117)とか、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」(-.129)と考える人は少ない。また、「一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいい」と考える人も、転職志向のある人に比べて顕著に少ない(-.146)。

次に、「20 年後も現在の延長線上にある内容の仕事をしていると思う」という項目で、キャリア継続志向を探ってみたところ、府中町 60.3%、三次市 61.3%。正規雇用に限ると府中町 65.5%、三次市 64.3%と少し高くなる。男性が府中町 72.8%、三次市 68.8%であるのに対して、女性は府中町 50.1%、三次市 54.7%。男性よりは少ないとはいえ、**キャリア継続志向を持つ女性は半数程度いる**。男性と女性の状況がかなり異なるので、別々に重回帰分析をすると、男性の場合は「経営者」の場合は肯定的傾向が強いが (.204)、「**仕事が主の非正規雇用**」の場合、否定的な回答傾向が強くなる (-.155)。収入は関係せず、職種・業種による違いにも説明力はない。**男性の場合、将来にわたるキャリアの継続において重要なのは、収入よりも雇用の安定性であると考えられる**。そのほか、「職場参加の地域活動・社会活動」への関与の度合いが強いと、肯定的な回答が強くなる (.153)。一方、女性の場合

は、最も重要な変数は「配偶者の有無」で、「配偶者あり」の場合は府中町 58.6%、三次市 58.2%と高いのに対して、「配偶者なし」が府中町 38.9%、三次市 47.8%と低くなる(.232)。このことは、女性の場合、キャリア継続の見通しを立てる上で、結婚が大きな転機になることを示している。配偶者がいない女性は、結婚・出産を経ても現在のキャリアを継続するかどうか、見通しを立てにくいのだと考えられる。また、年齢が上がると、キャリア継続について否定的な立場をとる人が増える (-.179)。これは 20 代と 30 代のあいだに世代差が見られるというより、加齢にともない、結婚・出産を経て、キャリアの継続を断念する女性が多いためではないかと考えられる。そして、女性の場合、職業では「専門技術職」に比べ、「事務職」(-.224)、業種では「飲食店・宿泊サービス業」(-.155)のキャリア継続に対する否定的傾向が目立つ。そして、「個人年収」が高い場合や(.172)、男性同様に「職場参加の地域活動・社会活動」への参加の度合いが高い場合、肯定的な回答傾向が強まる(.091)。そして、興味深いことに、この項目は「無理をしても、自分の目標に向かってチャレンジしたい」という考えとは相関しない一方、「人並みに安定した暮らしを手に入れるために、現実的に考えて行動しようと思っている」という堅実志向との相関が高い($r=.149$)。性別を問わず、多くの人々にとって、キャリア継続への意思があるということは、上昇志向溢れる、いわゆる「バリキャリ」的なものではなく、むしろ地道にキャリアを積み上げていき、安定した生活を実現したいという考えと結びついているようである。

次に、「20年後も勤務先を変えずに働いていると思う」のは、府中町 45.9%、三次市 47.3%。性別による違いが非常に大きく、男性が府中町 68.0%、三次市 66.1%であるのに対して、女性は府中町 27.9%、三次市 30.4%と大差がついている。女性は、その半数ほどにキャリア継続志向があるが、さらにその約半分ほどしか、同じ職場で働き続ける意思を持っていない。その他、男性の場合は、「会社経営者・役員」(.196)や「自営業主・家族従業員」(.171)の場合に職場継続傾向は強く、職業的には「サービス」従事者での否定的回答が多い(-.138)。女性の場合は、「個人年収」の説明力が大きいほか(.261)、「職場参加の地域活動・社会活動」(.141)や「地縁組織の活動」(.107)への関与の度合いも重要である。また、「販売」職での職場継続傾向が強いが(.141)、非正規就労が半数で、結婚・出産を経たあとに復職したと見られるケースが多い。

転職志向と勤続志向をクロス分析してみると、転職するつもりがなく、20年後も勤続しているだろうと考えている人は、男性のばあいは府中町 45.0%、三次市 43.3%であるのに対して、女性のばあいは府中町 20.7%、三次市 23.6%にとどまっている。男性の場合は、転職志向がありながら勤続志向がある人が府中町 23.2%、三次市 22.8%と多いことに注目できる。つまり転職を模索しつつも、結局はそのチャンスが見つからないのではないかと考えている人が多いということである。一方、女性では、逆に今のところ転職志向がないけれども、20年後は勤続していないだろうと考える人が多い(府中町 23.2%、三次市 18.8%)。これは、結婚や出産を機にいまの職場をやめようと考えている層であると考えられる。

以上の転職や勤続に関わる三つの項目すべてについて、転職志望の少ない人は階層意識

が比較的高く、転職志向に乏しい人たちは、各種の満足度を示す項目についても現状肯定傾向が強い傾向が見いだせる。また、どの項目についても「日本は、こつこつと努力すれば成功する可能性のある国だと思う」という項目とは正の相関関係がある。その一方で、「今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンスを求めて転職しようという考えは持っていない」人のほうが、「自分の将来には明るい希望があると思う」傾向が顕著である($r=.256$)。つまり、**転職を考えていない人のほうが将来に希望を持っている、ということである。**

4・6 仕事に対する自信

仕事に対する自信は、他者から得られる承認と大きく関わる。承認には、職場の内部から得られる承認と、職場外の人からの承認とがある。それぞれに項目を立てて尋ねてみた。

「自分の仕事ぶりは、仕事で関わる社会の人々に認められていると思う」人の割合は、府中町 57.6%、三次市 61.8%と過半数を上回る。この項目については、職種や業種、収入による違いがあまり見られない。男性の場合、「会社経営者・役員」の肯定的傾向が強い(.227)。また、「学校・保育所・幼稚園・同窓会組織の活動」に参加の度合いが大きいと肯定的傾向が強まるが(.247)、因果関係としては逆で、現在の仕事についての自信があるとこの種の活動に参加するモチベーションが上がっているとも考えられる。そして、学歴差もあり、「高卒」の者は否定的な傾向が強まる(-.133)。興味深いのは、説明変数としての「家事時間」の効果が性別によって異なっているということである。「家事時間」が長い場合、男性では「仕事で関わる社会の人々に認められていると思う」という回答が減る傾向にあり(-.189)、女性では逆に肯定的な傾向を増やす傾向がある(.152)。つまり、**家事・育児に時間を割きながら仕事をしているという状況は、男性には仕事上の負い目に繋がっているが、女性にとってはむしろ自負心を高める効果があると考えられる。**

また、「自分の仕事ぶりは、職場の同僚に認められていると思う」人の割合も府中町 66.3%、三次市 65.8%と多い。これについては、「職場参加での地域活動・社会活動」への参加の度合いの高さの説明力が最も大きい(.114)。収入や仕事についてのモチベーションの高さ(やりがい、天職という意識)よりも、職場参加の活動への積極的関与こそが、よりも職場の同僚からの承認と結びついているという状況は、日本の組織の特徴を示すものといえるかもしれない。その一方、男性については、職種による違いが大きく、「運搬・清掃・包装」(100.0%)では高く、「製造作業・機械操作」(50.9%)で低い。また業種では、「卸売・小売」で高く(86.2%)、「医療福祉」で低い(40.7%)。女性に限れば、やはり「家事時間」の説明力が大きく(.182)、長い家事時間にも関わらず仕事をこなしているという自負心が、肯定的回答の割合を高めていると考えられる。

4・7 仕事のモチベーションと長時間労働に対する考え方

「余暇の時間を大切にしたいので、仕事で長時間働きたくない」と思っている人の比率は、府中町 70.8%、三次市 68.3%。全体的傾向として、仕事で長時間働くよりは余暇の時間を大切にしたいという考えの傾向が、収入・地域・性別・年代・学歴を問わず強い。階層意識とも相関しない。ただし、「正規雇用」については府中町 71.8%、三次市 69.8%と余暇優先志向が強いのに対して、「仕事を主にしている非正規雇用」の場合は府中町 68.8%、三次市 63.8%とやや弱まる ($r=-.100$)。また、業種のなかで、余暇優先志向の強さが目立つのは「公務員」で、逆に弱いのは「農林漁業」であるが、「公務員」の就労時間の中央値は男女とも 50 時間で割と長めである。

そして、注目したいのは、この項目と「自分の仕事にやりがいがある」という項目との間に負の相関関係があることだ ($r=-.180$)。仕事にやりがいのある人は、余暇よりも長時間労働を優先しているということである。逆にいうと、仕事にやりがいのない人が余暇を優先したいと考えているとも言える。また、「仕事の現状」に対する満足度とは負の相関関係にある ($r=.152$)。そうしたことから考えると、「余暇を大切にしたい」という意識は、現在の仕事へのモチベーションの低さを示しているとも言える。また、「余暇の時間を大切にしたい」人は「一生過ごす場所として、広島のような地方都市はいいと思う」傾向が強いが ($r=.105$)、「中国山地のような田舎」に対する評価は低い ($r=-.083$)。余暇を過ごす消費や娯楽の環境として、「地方都市」が高く評価されていることを示す結果である。

「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思う」のは、府中町 47.7%、三次市 49.7%と半々に分かれる。最も説明力があるのは「高卒」の長時間労働肯定の傾向である ($.139$)。第二に「性別」で、男性が府中町 57.2%、三次市 55.7%であるのに対して、女性は府中町 42.0%、三次市 45.4%と低い ($-.111$)。ただし、女性は特に学歴による意識の違いが大きく、長時間労働肯定傾向は「大卒」が府中町 38.8%、三次市 39.1%と少ない一方、「高卒」は府中町 55.0%、三次市 62.9%と強くなる。そして、高卒女性は、「飲食店・宿泊サービス業」で勤務している者の割合が多い。第三に「世帯年収」の説明力もあり、年収が高いと否定的な回答が増える ($-.110$)。第四に「公務員」である場合、否定的な傾向が強い。また、男性に限ると、「配偶者の有無」の説明力が大きい ($-.226$)。配偶者がいない場合は府中町 61.9%、三次市 59.7%と長時間労働を肯定する傾向が強いが、いる場合は府中町 54.3%、三次市 52.0%にまで下がる。

ここで注意したいのは、「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわない」という考える人の生活水準は低めであるにも関わらず、「階層意識」は特に低いわけでもなく、収入に不満が多いわけでもないということだ。その一方、「やりがいのある仕事であれば、長時間労働でもかまわない」という項目との間に強いつながりがあり ($r=.527$)、「毎日の仕事を楽しいと思う」という項目とも関連深い ($r=.105$)。つまり、「高卒女性」の多くは、生活水準が低いにも関わらず、長時間労働を厭わない勤勉さがあるために相対的な

剥奪感に乏しく、むしろ毎日の仕事を楽しいと感じている傾向があるということである。

次に、「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわないと思う」のは、府中町 30.4%、三次市 30.8%。厳しい経済事情を反映して、否定的な全体傾向が強いことが確認される。配偶者がいると、さらに否定的な傾向が強まる。特に男性の場合、そうした傾向がある。配偶者がいると、自分の仕事のやりがいよりも、満足な収入を得て生活を安定させることが優先課題となるからだろう (-.142)。そして、最も説明力が大きいのは「個人年収」で、「個人年収」が低い場合のほうが否定的な傾向が強い (-.172)。個人年収が低い人にとっては、「やりがい」よりも「満足な収入」が優先すべきことであるということだろう。ところが、注目すべきは、他の業種よりも収入が低い「飲食店・宿泊サービス業」において、肯定的な回答傾向がむしろ強いということである (.075、府中町 54.6%、三次市 44.6%)。これに対して、むしろ世帯年収については高いほうである「医療・福祉」（やはり女性に多い）については、**全業種のなかでも最も否定的になる** (-.085、府中町 20.8%、三次市 26.9%)。これは、なぜだろうか。

「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」という人は収入満足度が高い ($r=.176$)。これは一般的傾向である。だが、「飲食店・宿泊サービス業」（府中町 45.0%、三次市 46.7%）の従事者は、「医療・福祉」（府中町 35.9%、三次市 31.7%）よりも収入についての満足度が高い。その一方、「飲食店・宿泊サービス業」従事者は「今の仕事にやりがいがある」者も府中町 55.0%、三次市 60.0%と他の業種に比べて相対的に少ない。これに対して、「医療・福祉」関係者（多くは女性）は、「今の仕事にやりがいがある」者が府中町 77.4%、三次市 78.5%と高い。一般的に言って、この項目と「現在の仕事にやりがいを感じられる」かどうかは相関しないのである。

つまり、今の仕事に「やりがい」があるか否かによって、その回答動機には二通りの労働観が考えられるということである。一つは、「やりがいのある仕事」であるゆえに、満足な収入を甘受するという労働観である。「やりがい」に見合った収入が得られないということになると、それは、いわゆる「**やりがいの搾取**」である。「医療・福祉」関係者は、まさにそうした傾向が強いからこそ、「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」という言い方に違和感を持つ人が多いと考えられる。これに対して、「飲食店・宿泊サービス業」の場合には、内在的な「やりがい」に乏しく、収入が低くてもそれを甘受する傾向がより強くなる。そうしたなか、労働者を支えるのは勤勉さである。「飲食店・宿泊サービス業」の関係者にとって、収入が低いのは仕方のないことであり、だからこそ、勤勉に働く日常を支える「やりがい」が求められるのである。そして、以下に見るように、それが長時間労働を肯定するメンタリティにも繋がっている。そうだとしたら、そこには「医療・福祉」関係者に見られる「やりがい」の搾取とは区別される、「**勤勉さ**」の搾取がある、とすることができる。

「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわないと思う」のは、府中町 47.1%、三次市 44.7%。最も説明力が大きいのは「配偶者の有無」 (-.184) と「世帯年収」 (-.129)。

「配偶者あり」の場合は40.3%で、「配偶者なし」の場合54.8%と比べて、否定的な傾向が強まる。また、「世帯年収400万円」以上で37.6%なのが、「400万円未満」で53.1%に上がる。また、この項目においても、「飲食店・宿泊サービス業」の肯定的な傾向(.085、女性に限ると.109)と「医療・福祉」の否定的な傾向(-.086)に説明力がある。「**やりがいがない**」飲食店・宿泊サービス業の**ほうが長時間労働を容認する**、という逆説的状况がここでも見いだせる。このほか、やはり「**高卒**」の**長時間労働肯定傾向が顕著**である。男女ごとに重回帰分析を行うと、男性は「個人年収」の説明力があり(-.142)、女性は「世帯年収」(-.167)の説明力があるということがわかる。いずれにしても、**年収が低いほうが長時間労働容認の傾向**がある。また、男性について、府中町のほうが三次市より長時間労働容認の傾向があるが、府中町のほうが男性片働き世帯が多いことと関係している。

以上からは、まず、一般に**労働より余暇を優先したいと考える傾向が強く、「やりがい」があるからといって、低収入や長時間労働が積極的に受け入れられているわけではない**ということが示唆される。むしろ、低収入であるからこそ、やむをえない長時間労働を支えるために、「やりがい」を発見することが求められるのである。内在的な「やりがい」がなかったとしても、勤勉に働き続けるために、自分で自分を納得させるやり方が必要だからだ。一方、そもそも内在的に仕事の「やりがい」を感じられるような仕事である場合には、むしろその「やりがい」ある仕事に対する正当な対価を求める意識が強くなる。このように仕事観の違いは職業の違いとの関係が大きく、「階層意識」とは相関しない。

4・8 職場の対人関係観

職場の人間関係を評価するさいに、お互いに協調的で一体感がある関係としての「同質性結合」に注目する捉え方と、互いに異なる意見を自由にぶつけあうことができる関係としての「異質性結合」に注目する捉え方がある。それぞれについて、どのように評価されているだろうか。

「お互いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想だと思う」のは府中町87.0%、三次市90.4%と、ほとんどの者がこの考え方を支持している。特に、「職場参加での地域活動・社会活動」の参加の度合には説明力がある(.089)。最も評価の低い「製造作業・機械操作」でも77.3%が支持しており、**社会的属性を問わず、「協調性」や「一体感」のある職場が理想とされていることがわかる**。

一方、「お互いに個人の自由な考えを言い合い、正直な気持ちで付き合える職場が理想だと思う」のは府中町81.0%、三次市76.9%と、一見対立する価値観であるにも関わらず、こちらも大半の者が支持している。重回帰分析では、「製造業」(.143、特に男性)や「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」への参加の度合の高さ(.128、特に女性)の説明力が強いが、そのほか「他地域で就学後Uターン」した層もこの考え方を支持する傾向

が強い (.094)。「製造業」は他の業種に比べて、ダイバーシティを尊重したコミュニケーションが重視される傾向があるということが考えられる。

理論的には、職場内の「同質性」を重視するか、「異質性」を重視するかは価値観の対立ポイントとして考えられることが多い。だが、この二つの項目の回答傾向は似ており、相関は高く、支持する人はどちらの項目も支持している ($r=.421$)。どちらの価値観も「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思う」や、「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわないと思う」という意識と親和的であり、長時間労働を厭わない勤勉性に関わっていると見られる。仕事観として勤勉性が何より重視され、「組織の一体性」の重視と「個人の自由な意見」の尊重という論点に対立したものと受け取らないところは日本的な組織文化の特徴と言えるかもしれない。ただし、生活観や人生観としては違いが出ている。「組織の一体性」を重視する人は、「人並みに安定した暮らし」($r=.161$)や「平凡な幸せ」($r=.113$)を求める傾向が特に強い。一方「個人の自由な意見」を尊重する人は、「組織に縛られない自由な生き方」($r=.258$)を重視する傾向が強い。

4・9 出産後の女性の職業継続に対する考え方

「女性は子どもができて、ずっと職業を続けるほうがいいと思う」という回答は、府中町 61.3%、三次市 69.4%ととても高い。重回帰分析では、「サービス」(.186)または「事務」(.130)という女性の割合が多い職種で特に肯定的な回答傾向が強い。そのため、女性のほうが男性よりもこの考え方に肯定的な傾向は少しあるが(女性 67.7%、男性 62.2%)、その説明力は、職種による違いに解消される。注目すべきは、女性については現在就業中の人と専業主婦との間で女性の職業継続についての考え方が割れていて、専業主婦については男性よりも否定的な回答傾向があるということだ (-.108、府中町 49.4%、三次市 58.0%)。ただし、専業主婦と有業女性の価値観を対立した構図で捉えるのは適切ではない。専業主婦を含め、女性の就業継続に批判的な考え方は「家事(育児・介護を含む)の負担への不満」と結びつく ($r=-.089$)。つまり、女性は家事をするべきだという伝統的性役割観が強いから専業主婦になったというわけではなく、家事や子育ての負担が大きく、仕事との両立が困難であることを鑑みて、職業継続を断念したというケースも多いのではないかと考えられるからである。

また、この項目は「生活満足度」や「階層意識」などとは相関しないが、人生観に関わるいくつかの項目と相関する。すなわち、女性の職業継続を支持する人は、「無理をしても、高い目標を立ててチャレンジ」($r=.121$)したい人や、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」($r=.166$)という自己実現志向が比較的に高い。